
教育講演 2

座長： 近畿大学医学部内科学教室腫瘍内科部門 渡邊 諭美 先生

演題名

乳がん領域の Patient advocacy

氏名：増田 紘子

所属先：都立駒込病院 外科（乳腺）

Patient advocacy とは、患者の立場に立って、政策や制度面から問題解決に取り組む活動を指す。日本でも実臨床において、Shared Decision Making や Patient-Centricity の概念の普及に伴い、意思決定の場に患者・市民の 関与を求める Patient-Public Involvement(PPI)の考え方が広がってきている。

乳がん領域では海外同様、乳がん体験者コーディネーター(BEC)養成講座などがあり、乳がん体験者や乳がん患者支援者が乳がんに関する知識を体系的に学ぶこと、最新の情報にアクセスするスキルを養成し、患者支援活動を行っている。

政策提言、社会全体への活動という面では、CancerX という産学官民医といった多様な立場の人が力をかけ合わせ、がんの社会課題の解決に取り組む組織が 2019 年に発足し、自身もその活動の立ち上げに従事した。日本での新たなパシエントアドボカシーの風を感じた経験であった。

一方で米国では、さらにその先の医療の進歩に対する貢献も積極的であると感じる。Susan G Komen Foundation などの患者団体が研究資金提供や政策提言を通して医学・医療の 進歩に貢献していたり、自身が留学したテキサス州立大学 MD Anderson Cancer Center では、研究 meeting に患者団体が参加し、直接議論に参加し、協力したいと感じた研究に寄付をするなどの活動が行われていた。

本講演では乳癌領域における Patient advocacy について、アメリカと日本の違いや自身の経験にも触れながら考察したい。